太陽ニュートリノ+KamLAND の現状とθ₁₃

東大ICRR 池田一得 2010/2/9

もくじ

- 2008年の研究会のおさらい
- それ以降の新しい結果
- ・太陽ニュートリノ3世代解析
- 太陽v+カムランド3世代解析
- ・今後の展望

前回(2008年)のおさらい



前回のおさらい

Neutrino Oscillation Parameters



Best-fit light side: $\Delta m^2 = 7.58^{+0.21}_{-0.20} \times 10^{-5} \,\mathrm{eV}^2$ $\tan^2 \theta = 0.56^{+0.14}_{-0.09}$

Best-fit dark side: $\Delta m^2 = 7.64 \times 10^{-5} \,\mathrm{eV}^2$ $\tan^2 \theta = 1.84$

Patrick Decowski / UC Berkeley

スペクトルの歪み測定の重要性



2008年からのアップデート 新しい実験及び解析結果

今日のメイン

- Borexino 8Bニュートリノの観測 2008年8月
- SNO Phase-I,IIの再解析 2009月9月
- SK-III の結果 2009年12月

θ13を考慮したグローバル解析

- T Schwetz et al. 2008年
- G. L. Fogli, E. Lisi 2009年
- SNO group 2009年9月
- SK group 2009年12月
- などなど。。

Measurement of the Electron Neutrino Survival probability



Borexino のつづき



⁸B: 統計をためる(5年の統計量で3σ)

SNO再解析



Systematic	Old Uncertainty	New
Energy scale	1.2%	< 0.5%
Energy resolution	4.5% (D ₂ O)	< 2%
	3.4% (salt)	< 2%
eta_{14} (isotropy)	0.85% (electrons)	0.25%
R^3 fiducial volume	3%	1%
$\cos heta_{sun}$ (angular resolution)	16%	11%
Neutron capture efficiency	2.1%	1.4%





A global fit of all solar + KamLAND data for a two-flavor oscillation model:



Old contours (KamLAND collab., PRL 100, 221803 (2008))

New contours after LETA

Best-fit-oscillation parameters ($\pm 1\sigma$ limits of 2-D parameter region)

 $\Delta m^2 = 7.59^{+0.20}_{-0.21} \times 10^{-5} \text{ eV}^2$ $\tan^2 \theta_{12} = 0.457^{+0.040}_{-0.029}$

⁸B uncertainty from global fi t: +2.38%,-2.95%

SK-III最新結果

SK-III太陽ニュートリノ観測

SK-I(1996年~2001年実測時間1496日までの観測)と違う点

- FRP+アクリルカバー
 が全PMTに取り付けられた[©]
- ・ 検出器較正の改良[□]
 新しい短パルスレーザーを用いた全PMTの応答時間較正システムの構築
- リダクションツールの改良☺
 カット条件、及び系統誤差の見積もり直し
- ・ 方向再構成方法☺
 反跳電子のエネルギーを考慮した再構成方法を考案 約10%分解能が良くなる
- 検出器シミュレーション©
 検出器のZ位置によって異なる水の透過率を導入
 エネルギースケールの不定性が0.64%から0.53%になる
- FRPによるBG増☺
 - →水循環システムの改良

不純物除去効率を上げる。水流の制御で検出器内部BGを削減 →PMT時間較正及び新リダクションツールで削減。

<u>4.5-5MeVで1/4、5-5.5MeVで2/3程度になる。</u>

・ 統計量が約3分の1(2006年8月から2008年8月 実測時間548日)◎
 →系統誤差を小さくして勝負する=2.3%
 全フラックスに対する系統誤差が2/3になる

<u>SK-III 実験結果</u>

・各リダクションステップでの事象数 :低エネルギーでBG削減

► 5-20MeV 太陽角分布 :系統誤差がSK-Iの2/3

4.5-5MeV 太陽角分布 :~4σレベルで信号を観測。 誤差(統計)の範囲内で 5-20MeVのフラックスと一致。





振動解析結果とまとめ

SK-IIIで得られた結果とその他全ての 太陽ニュートリノ観測実験の結果と合わせる 0.7 ことで、これまでで一番精度よくパラメータを 決定することができた。 0.6 スペクトルの歪みは統計的に有意ではない。 全太陽v実験からの結果 0.5 $\sin^2 \theta_{12} = 0.29^{+0.024}_{-0.011}$ $\Delta m_{12}^2 = 6.03^{+1.21}_{-1.67} \times 10^{-5} eV^2$ 0.4 ∆m² in eV² _01x 全太陽v+KamLAND $\sin^2 \theta_{12} = 0.304^{+0.017}_{-0.016}$ 0.3 $\Delta m_{21}^2 = 7.59^{+0.12}_{-0.39} \times 10^{-5} \text{ eV}^2$ Solar 0.2 1 0.1 KamLAND Ω 0 0.0 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 0.6 0.7 0.8 0.9 1.0



SK-I,II,IIIスペクトルと振動解析からの期待値



<u>太陽v観測の現状(+old)</u>



<u>太陽v観測の現状(+old) その2(振動あり)</u>







太陽v+KamLAND におけるΘ13の測定

- ・イントロ
- ・方法
- 測定結果
- 展望



KamLAND (2008) from official site

太陽v、KamLAND 大丈夫?

SNO-III (2008)



Fogli et.al arXiv:0905.3549v2 例えば、SK-ES,SNO-CCからの8BFlux, SNO-NCの8BFlux, SSMの予想する8BFlux はエラーの範囲で一致

大丈夫です。 太陽v観測もKamLANDも 結果に十分自信を持っています (エラーの範囲内で)







θ₁₃の項の確認



Fogli @ Neutrino Telescopes 2009

※物質効果から真空振動へのtransitionは上の式に含まれていません。

太陽ニュートリノにおける
θ13



太陽v観測とKamLAND観測の関係



Balantekin & Yilmaz [arXiv:0804.3345, J.Phys. G 35, 075007 (2008)]

θ₁₃の効果



Fogli et.al arXiv:0905.3549v2

Global解析

- SK-I,II,III Spectrum and time variation (2006,2007,2009)
- SNO : CC flux(2002+2005) NC flux(2007+2009), Day/Night asymmetry(2002)
- Radiochemical : Cl, Ga
 - New Ga rate: 66.1 +- 3.1 SNU (All Ga global) From Phys.Rev.C80:015807,2009.
- Borexino
 - ⁷Be rate: 48 +/- 4 cpd/100tons
 PRL 101: 091302, 2008
- KamLAND 3rd results PRL 100, 221803(2008) (1600 day)
- 実際に動かす振動パラメータ

 $-\theta_{12}, \theta_{13}, \Delta m_{12}$ ($\theta_{12}\Delta m_{12}$:LMA, $\sin^2\theta_{13}$ =0-0.1)

- $\Delta m_{23} = 2.4 \times 10^{-3} eV^2$
- θ23=2/Pi, CP位相=0, Normal Hierarchy











まとめ

- 太陽vとKamLANDの精密測定により
 それらの実験による0₁₃観測が可能になった。
- 太陽v+KamLANDによるθ₁₃の現状は 1.2σ~1.5σの有意性でθ₁₃>0
- 今後KamLANDとSKのupdateで感度向上